

< 登場人物 >

勇太(13歳中学生) 剛太(勇太の兄 : 大学生)
母(50歳 白血病を患う) 父(50歳 サラリーマン)
在宅医(比較的若い医者)

絵本の概要 仕上がり B5 サイズ・4C・中綴じ・32 ページ
実話をもとにした家での看とりの紹介。若い世代にも知ってほしい在宅医療に係わる用語類の紹介とその説明(リビングウィル、死亡診断書等)
男性介護者たちの介護情景(核家族化に伴い、従来の男女役割分担にとらわれない介護、すなわち「男の介護」が必然となっておりますが、それにも触れるものとなっております)。

制 作 者 絵と構成 : 吉田 恵子
(アートディレクター : 夫を施設ホスピスで看取った経験者)
文 : 吉田 利康
(エッセイスト : 妻を家で看取った経験者)

< あらすじと絵の紹介 > 絵本の一部をご紹介します。実際の絵本の文章とは異なります。



「美しい、じやまするな、顔してや。死ぬ」
 「どうだ、まいったか、おれさまの顔さ。みたか」
 「あっ、ちくちく。生きかえったか、くっせー」
 勇太は、13歳、中学1年生。
 学校から帰ると、ずっとゲームに夢中で。
 「いつまでゲームをしているか」を、母の忠告だよ
 うるさいお母さんは、病から病院へ行ったときです。

道にドアがあって、お父さんが帰ってきました。
 「なーんだ、帰るもつづにー」
 お母さんは帰らないから、カツ丼でも食べに行こうか
 「うん！ 行く、行く」
 夕暮れの街へ、勇太とお父さんは、自転車をほらせます。

P1~ 2

突然のお母さんの入院

朝から病院へ行った母は、夕方になっても帰ってこない。勇太は、鬼のいぬ間に洗濯とばかり、テレビゲームに熱中する。父が帰り、カツ丼屋さんに行こうと勇太を誘う。



P8

お母さんの闘病と家族

母は、白血病だった。2ヶ月の入院が必要と知らされる。そんなある日、勇太はおなかが痛くなり学校を早引け。診察した医師は、心労が原因する自律神経失調症という。

2ヶ月と言われていた入院だったが、4ヶ月がたち、その後も入退院をくり返し、やがて1年になる。そして、同じ季節が巡ってきたころ、少しずつ足が遠のいていた病院へ、面会に行った帰り道、勇太は交通事故にあう。



勇太がカツ丼を食べ終わったころ、
 お父さんは、お母さんが帰らないわけを、はなしはじめました。
 今日から2ヶ月ほど入院すること。おんたんに病を病気でほないこと。
 「早くかかっても、元気になるんだろ？」
 「お父さんは、一ヶ月も、余裕があると云ってくれたよ。おんた、心配ない」
 ニッコリ笑いながら、お父さんはこたえました。
 でもお父さんは、泣いたまっつらおんを、少ししか食べていません。
 勇太は、それに気づいていました。

勇太の父は、勇太と云います。
 大学2年生です。大学1年の卒業で、夜おそく帰ってきました。
 「僕の卒業、お母さんは、自転車だった。
 盗難がおわって、すでに入院したよ」
 それを聞いた勇太、勇太の目から、涙がこぼれおちました。

P3~ 4



P7(一部)

もう治らない

秋が過ぎ、冬になる。そして、もう少しで春になろうとする頃、母は余命告知を受けた。それから一ヶ月ほど経ったころ、母の表情にいつもらしさが少し戻ってきた。安心したのか、父の精神状態が、限界に近い状態となる。遂に病室の妻の前で、ベソをかいてしまう。そんな夫を励ましたのは、死と向きあっている妻だった。夫が正直な姿を見せたからだろうか、妻は「家に帰ってもいいだろうか」と夫にたずねた。



P9~ 10



P13~ 14

お母さんが帰ってくる

在宅療養への移行が決まったとたん、打ち合わせもしないのに、家族各自、連携のとれた動きをするようになる。そうして、帰宅の受け入れ準備は整っていった。ところが、困ったことに在宅医が見つからない。かかりつけ医に訪問診療を断られ、新たに医者を探すが見つからない。でも、母の帰宅がうれしい。それが原動力となり家族は、様々な課題を乗り越えていく。「男の介護」の始まりだ。



お母さんが帰ってきた

五月の緑が美しい季節に、母は家に帰った。久しぶりの家はよかった。痛みのため、病院では眠れなかったのに、家に帰るとたん寝てしまった。病院では、食事がのどを通らなかったのに、ラーメンをたいらげた。以前は、剛太の長電話、勇太のテレビゲーム、お父さんの歯ぎしりや寝言などうるさいだけだったものが、心地よく感じられる。



P19~ 20



P16



P17

新緑の季節に
 勇太の長電話
 剛太の寝言
 歯ぎしり
 などうるさいだけだったものが
 心地よく感じられる
 今も一日の生活が
 素晴らしいです

実際に書かれたお母さんの手記 P18

そんなある日、勇太は、家族そろって出かけた自然の中で、不思議な体験をする...



P23~ 24

別れ

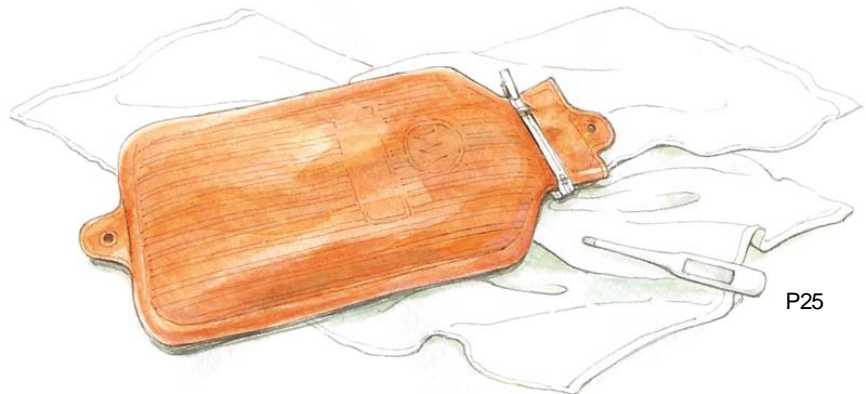
帰宅から10日が過ぎたころから、母は急に弱りはじめた。13歳だった勇太は、もう15歳になっていた。看護師さんと一緒に、母の傷口の手当もした。つらかったけど逃げなかった。病院では、なかなか体験できないことである。せん妄が始まり、お母さんは変なことを言い出した。その姿を、勇太も剛太も、そばで一部始終見ている。

旅立ちが近いと知らせる医師に、「そんなに病気が悪いのに、なぜ、なにもしないのか」と、疑問をぶつける長男の剛太。「お母さんの意志を尊重するため」と説明する在宅医。

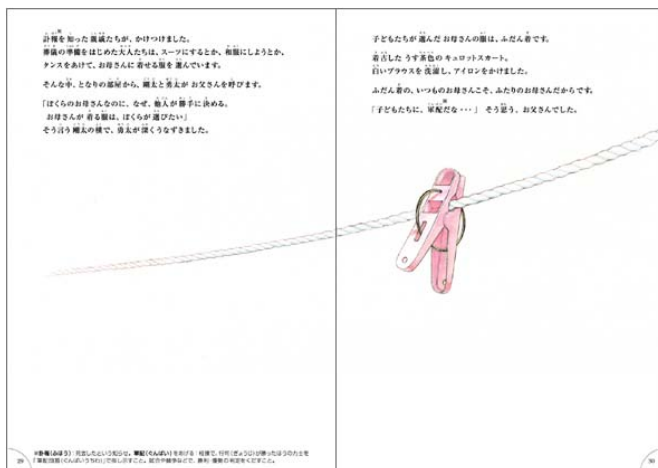
母は、リビングウィルを持っていた。枕元には、必要最低限の飲み薬と、氷枕と体温計と血圧計しかなかった。



P27~ 28



P25



P29~ 30

母の旅立ちの服装は、勇太と剛太が選んだ。それは、母が普段よく着ていた白いブラウスと、少し色あせたベージュのスカートだった。